

自 分 史

北海道 金 谷 茂 敏

北海道北見国紋別郡紋別村ニタトル式番地

生年月日 大正十四年四月一日

父金谷茂一・母きさ 長男。七人兄弟。姉二人、第二人、妹二人。紋別尋常高等小学校高等科卒業。札幌商業学校。

昭和十八年十二月 学徒動員令にて繰上卒業。

昭和十九年一月 満州帝国政府 興農部大臣官房人事科勤務。委任官試補。

新京特別市至聖大路南湖寮百五十号室 同室ニ京大出身 堤正之氏 二人十畳間。

昭和十九年一月 茨城県友部村、満蒙義勇軍開拓農場、内原訓練所入所、二カ月訓練後、渡満す。

興農部大臣官房人事・黄富俊氏、次長・稲垣征夫氏（東大卒）

人事科長―藤尾廉三氏（東大卒、昭和二十年七月中旬ころチチハルにて八路軍に銃殺される）
人事科勤務中―表彰式、開拓団、畜産司。

馬政局、林野局、満州葉煙草公社等勤務中に随行（抱持）にて吉林、佳木斯、牡丹江、黒河など、北満地方回る。

一緒に渡満者六十名。

農業、林業、山林、農蚕、中学、商業、全国より卒業者、各地方に分散す。（名簿保存す）

昭和十九年十一月一日、満州鞍山独立野戦高射砲八六〇部隊、一三二〇五部隊満官大隊十中隊第二小隊に現役兵として入隊す。部隊長・松本春男少佐ニ九九式新高射砲、高度一万メートル。在満にて一カ所ニB29、目的とす。入隊時幕舎（テント）ニ三角兵舎と独立部隊編制のため忙しい。小隊長、見習士官訓練のため異動。南方方面に転属。また、朝鮮兵も各中隊に配属され（現役兵として）、中隊長、小隊長付士官、内務班長、一苦勞したことを思います。

昭和二十年二月―三月ごろ、第二次初年兵入隊（第

三次?）、ワラ弁当箱、地下足袋、竹筒の水筒にビツクリ。内地（本州）も物資不足か。大学、高専、中途入隊者は、体格、身長、不足。不調。内務班にて軍人精神を鍛えられ、食事も喉に届かない状況を見ると、一次現役兵は良い方だと、同年兵と話したことがあります。

それにしても軍隊は不思議な社会、団体、生活場所だったとしみじみ感じております。

職業、年齢も異なり、国のため、郷土のため、家族のためと目標一丸一致と協力する。日本独特の教育。

島国出身が、良いのか悪いのか? 初年兵教育期間中自己申告か経歴調査か不明。内務係准尉 村田理作氏?と記憶しておりますが、水野末雄曹長（内務係）に呼び出され訓練終了後、使役。本部にて雑役手伝い。満州政府人事科勤務が役に立ち、同年兵より楽したのではないかと思っております。

八月陣地撤去。関東軍唯一の九九式八高（ハセンチ高射砲）を野戦用に、対戦車攻撃の任務に変わり、コンクリートの砲床にボルトで締めてあり、火炮撤去に

困難をきわめ負傷者多く、砲身運搬のトラックが横転、砲身の下敷きとなり二名の入院もある。八月十五日、重大放送あり。奉天駅集合、ラジオにて終戦を知る。

半島出身兵の言動不穏（内務班長。内務班付下士官にお礼参り）状況。第一中隊長橋本景行中尉の説得にて治まり、現地除隊す。

また、在満入隊者。満鉄、満炭、電々などの技術者も除隊する。二中隊一緒の同年兵・山崎彰、四国愛媛県越智郡弓削村字弓削浜都出身、昭和二十四年、御両親に手紙送るも帰国なし。

不明? 私も新京へと思ったが、満語（北京官話）だけ、露語も中途半端、委任官登用試験にと勉強していたが自信なく、部隊と共にす。東北大学铁路学院に移り武装解除。八六〇部隊と一二三四部隊（照空第一大隊）と混成大隊約千名、二十五作業隊として九月末ごろ出発、有蓋貨車にて黒河へ。徒步行進。アムール川（黒龍江）の河畔まで野積みされた被服一装用を取り替えたり、また乾パンを大量に携帯、空腹になり乾パンだけ食べ、残りコンペイ糖と水は二日か四、五日か、

行軍中小便が出なく、糖尿病だと戦友と話した記憶があります。

黒河より船にてブラゴエシチェンスクへ。輸送列車は家畜用の二段有蓋貨車で、バイカル湖を日本海かと思うほど長い時間……。以下省略（抑留軍人、一般邦人も手記しているのだ）。

昭和二十年十一月四日か五日か、中央アジアのカラガンダ着。約十キロくらい徒歩。第九九收容所第十一分所俘虜收容所入所、苦難の道へ。中隊ごとに作業班編成、二中隊・林立中尉のもと、粘土掘り作業中隊となる。

今から考えると、良いか悪いのかは、各個人の判断に思うことがあります。

部隊長松本春男少佐（コチコチの軍人氣質、通称下士候出身の将校と？）、軍人は解散、除隊まで軍人であるの命令には服従。俘虜になっても毎朝東方の宮城遙拝、点呼。当番使役、軍隊組織のまま。将校、古年兵、一次、二次、三次の初年兵、いつまでも変わらず。独立部隊二カ所の編成なので、よかったのではないか？

病人、怪我人は少なく、病人は早く帰国したのではないかと。芝田軍医、笹本軍医の診断は的確で、同年兵、古年兵より帰国後聞きました。困ることは、民主主義、共産主義、勉強、ノルマ達成しての食料増配。通訳、菅季治見習士官（北海道出身北見国野付牛出身（現北見市）、野中卒、京大卒、哲学者）部隊照空隊所屬と面識はないが、名通訳といわれていた。

復員後、国会審議で有名な「徳田要請問題」で証人になり、政治的圧力か、俘虜のツルシ上げか？ 東京都吉祥寺駅付近で「人類万歳、真理万歳」を心に叫びつつ、自らの意志で、鉄路上投身自殺。若き哲学青年？先輩でした。同じ郷土出身、野付牛には母の妹、叔母さんがおられ、感無量です。

約二カ年、軍隊式、一番民主的、共産党に染まるのが遅いと戦友より聞いております。

菅見習士官の小隊、一次、二次、三次の初年兵が十分所出身者を調べ、古年兵共々「十一会」と命名、昭和三十七年より全国大会を開催。平成六年「五十回忌物故者慰霊祭」、遺族も二家族、松本部隊長も五十

年ぶりに会う。いまだに続いております。遺族の松村秋夫、初美夫妻、静岡県の赤堀信平氏（同じ二中隊出身、明治生まれ、栄養失調：最後は記憶なし）の長女に参列していただき、ホッとしております。

人間の運命とは思議だなあ、と最近心身を感じる年代になりました。

昭和二十一年四月中旬、材木降ろし作業。夜通し、全車両の降ろし完了まで帰営ならず。二分小隊長（河西大治見習士官）、三分隊長としてノルマ完了。ようやく食事。黒パン、酸っぱいワダースープ、冷えた体に熱いスープ。熟睡するどころか急に腹痛で腹を押さえて走り回る。バンドで締めつけても止まらず、紐で腹を締めつけ、一晩中走り回る（後日、盲腸炎と判明）。翌朝練兵休。軍医の診断でカラガンダ、スパーク療養所行き、手術だ。二日くらい休み、その間タバコの紙に中隊仲間の氏名、住所、出身地を書く。

「知らぬが仏」と言うが、ただお腹が痛いと言って散らしたのだ。復員後の二十六年、東北大外科出身の島田義範陸軍軍医大尉（個人経営医で、柔道四段（全

国制覇）大学のモサ）によく助かったと言われる。これが第一回目。

スパーク療養所に二カ月間、手術もせず。日光浴、白パン、野菜スープ。若さのせいかな、使役にまた。検査にてアジーン（一級）で炭鉱へ。九分所炭鉱で三交替。ドイツ兵、ルーマニア兵、ロシア兵（ウクライナ出身「黒海、裏海、強制移住者」独ソ戦にて抑留されたソ連兵。スターリン・ニエハラショ）。炭鉱にて炭じんで黒ん坊。目、マツゲの炭じんは取れない。シャワーにてヤボンスキー、ハラシヨ、ダンケシェン（独語）、ルーマニア兵、世界は広い、食事は平等、検査なし、十カ月くらいか？ 軍隊手帳の余白（白紙、美濃紙に記入した二中隊の名簿）に書いた宝物で、復員後、ハガキにて通知したのが役に立つ、記憶は？

自分の書いた字が過去を思い浮かべせる。不思議だ。炭鉱の兵舎、二段ベッドの上で古年兵三人、同年兵か、よく郷土の話。名産品の食べ物、腹が空いているので眠れず、よく聞こえる。一人の古年兵が話しながら、編み物、針の手縫い、器用だ。同年兵の上衣、下衣を

話しながらホコロビを直している、男でもできるのだ。後で聞くと八人きょうだいの五人目で一人だけの長男だと。見よう見まねの習慣か？ ビックリ。

自分も姉二人を思い浮かべる。

炭鉱で杭木がミシミシビリビリ、割れる音、炭じんの粉、暗やみ発破、スコップでコンベアーに積み込み作業。

また切羽に発破、ワゴン車に石炭積み込み、カンテラの灯油の煤、暗い、頼るのは頭上につけている電池だけ、石炭の中に埋まる。戦友に助けられる。これが二度目か？

十カ月たったところか、鳥目、夜盲症にかかり、地上勤務。アルマアタ、サマルカンド、農作業、野菜積み込み。コルホーズ、二十人くらいの戦友と（部隊が異なるので経歴不明）転々と地方を回る。バケツ一杯の水配給。塩もない。夜中に野菜畑に侵入、カンボーイも一緒。人の物は我が物、見つからないとネズナイ（知らぬ）、ニエハラシヨ。野菜運搬のトラックで歌うコーラス、何十台分か。独、ルーマニア、ポーランド、

ウズベクのロシア一般人男女。コーラス合唱、広い大地、砂漠地帯、今でも思い出す。

若い人生、体力、気力、ダモイ（帰国）とまだ夢、希望を持っていたが、古年兵、関特連、下士官、兵、御苦労様としか言葉に出ない。

突然の帰国、長い日々も短い。ナホトカ到着。一分所、二三分所、書いた手帳、メモは焼却と共産党指導者、アクチブの命令。ダモイ取消し、焼却？ 部隊じゅう混乱。俺も焼くか？ 迷ったが、同じ中隊の戦友皆無。軍隊手帳の和紙に書いたメモを隠し持ち帰りました。この宝物にて二中隊の戦友を捜し、役に立った。

また、炭坑地区ハラシヨ部隊、一日か二日で「遠州丸」に乗船、昭和二十三年十月二十九日舞鶴港に上陸。青々とした山林、澄んだ日本海、白衣の看護婦さん、岩壁に立つ老婆、「息子は知りませんか」立て札に書いた名前、声を上げる光景。帰国したのだ、日本に帰ったのだ、両親、姉妹に会える。どうしているか、元気か、今でもその感激が身にしみ、時々思い出します。

同年十二月一日、北見本社、一力無盡会社就職（現北洋銀行バンカー？固い職業？信用第一？）と無我夢中。軍隊ボケ、抑留ボケを取るのに一苦勞。三十七年勤続、定年まで。

たまに質問あり。共產主義者か、赤化しているのか、黨員か。仏教は浄土真宗、もの知らず、国粹黨員、日本男児ですと反論。マルクス弁償法読破しました。国に反する思想と思ったので反対しています。

地方でシベリア帰りの友人はリストに乗り、大分苦勞した様子。

転勤も度々、医師、教員、税務署員、警察官、市町村の役席、養老院、町議員、飲食店、料理屋、置屋、弁護士、裁判官、公証人。銀行員のバッジ、名刺、印鑑、領収書、鞆に入れ、自分自身を売り込んだものです。

菅季治見習士官の真実の一つ、本当に役に立ちました。本当の事、失敗した体験を話すことで友達、知人を得、自分自身の勉強になり、人生の指針になったものでは？

また、満州帝国政府の人事科勤務、復員した軍隊手帳のメモ、宝物にて、中隊の遺族訪問。静岡県小笠郡赤堀信平氏の妻女訪問。親戚一同、八十二歳の赤堀達平氏妻女の喜久さん（養護老人ホームより車椅子で帰宅）、左半身リハビリ特訓中（七十歳）。長女松村初美さん四歳のとき赤堀先輩の再召集（赤紙）。次女の久保田美由紀さん（御殿場市）、自宅近い土手にある墓、お参りしたのが昭和六十年か。妻女の苦勞話を聞くと、留守家族もまたそれぞれ苦難の道、若い私が訪問したのでビックリされたことでしょう。

栃木県河内郡大沢村山口に福田清氏の遺族訪問。山林の中の墓地に参拝。妻女と長女の孫娘が日光東照宮の神子。妻女と娘さん（長女）と三人でお札・官札か、団体客の列と別に見学し、福田清氏の妻女も十数年ぶりと、ゆっくり回り歩いた。また、日光の滝まで車で見学させていただき感無量。軍隊手帳のメモと年一度のハガキ通信。宝物で遺家族に喜ばれ、責任の一端を果たしたと安心しました。

まだ不明の抑留者が大勢いるが、五十年の歳月、記

憶力の減少、老化に負ける。自分のメモ書き、手紙があると思ひ出す状況です。

それにしても誕生日が四月一日の早生まれ（現代的エイプリルフール、四月馬鹿へ一日だけウソを言っても良い日）の格言？）。

良かったのではないか、小学校入学も一日付で早い、現役入隊もまた早い、サラリーマン生活も定年を一日違いで四月いっぱい、月給、ボーナスも一カ月分支給あり。日本の慣習か、年度末三月三十一日が締切り。官庁、経理担当者に反論して「法律に規定されている」と言って、役に立ちました。

復員後三年目、父の死亡。残った手紙にて、親戚の伯父、伯母を捜したり、長男とし一家の主人、義務を果たす（手紙の保存、手帳のメモ、数十冊まだ保存中）。妻、妙子（平成二年死去）にも、宝物と言っても価値がない、ガラクタ物を人切にしていると笑われたが、シベリア抑留中の経験が身にしみ込んでいるのではないかと自分自身で納得しています。

長男と二人の生活、三度の食事作り、毎日忙しい日々

です。自分が食べるためにと頑張っております。

【執筆者の紹介】

大正十四年四月一日 北海道紋別市に出生。

昭和十四年三月 紋別尋常高等小学校高等科卒業。

昭和十八年十二月 札幌商業学校卒業。

昭和十九年一月 満州帝国政府興農部大臣官房人事科委任官試補に採用される。

昭和十九年一月 茨城県友部村満蒙義勇軍開拓農場内原訓練所に入所。

昭和十九年三月

昭和十九年三月 右訓練所終了。

昭和十九年三月

昭和十九年三月 満州新京市満州帝国政府に赴任した。

昭和十九年十一月

昭和十九年十一月 満州鞍山独立野戦高射砲第八六〇部隊（後に一三一〇五に変更）に現役入隊する。

昭和二十年八月 奉天市で終戦を迎える。

昭和二十年八月 入ソ。

昭和二十年八月

昭和二十年八月

昭和二十年十一月

中央アジア、カザフ共和国、カ

ラガンダ第十一分所ラーゲルに収容された。

昭和二十一年四月
スパーク療養所に入院。

昭和二十一年六月
右療養所退院後、炭鉱で労働に従事、またコルホーズで野菜などの積み込み運搬作業に従事した。

昭和二十三年十月二十九日 遠州丸にて舞鶴港に上陸
復員する。この間三年三カ月の抑留体験をされた。

昭和二十三年
現在の北洋銀行紋別支店に就職する。

昭和二十九年
結婚して三人の子供に恵まれ、幸福な生活を送られる。

昭和六十年
右銀行を定年退職された。

平成元年
全抑協札幌支部に入会する。

平成三年
支部役員に推せんされる。以来、慰霊碑の建立事業及び慰霊祭の開催等に委員の一員として積極

的にその任の遂行に努力された。

(北海道 森 英一)

シベリア抑留記

滋賀県 小西 信太郎

出生から入営

私の家は貧しい紀州和歌山県日高郡南部より兄弟揃って近江の国に移籍、父小西信吉は現住所・滋賀県蒲生郡金田村大字長田九百九拾八番地に住みつき、土地も借地、母キヨの間に二男として生まれたが、長男は生後二カ月で当時流感のため死亡、両親は私を長男として、大事に育ててくれた。母は私の三歳のとき、和歌山に里帰り途中、連絡船に乗船中、船酔いがもとで健康を害し、肺を悪くして薬石の功なく、私の五歳のとき、この世を去りました。

そのころ、わんぱく盛りの坊主で、葬式の当日、悲